

対 談

オリヴィエ・メシアン その音楽世界を語る

[ピアノ]

[チェロ]

河村尚子×ヴィッテラー



本年8月、ドイツ在住の河村尚子さん(ピアノ)、ウルリッヒ・ヴィッテラーさん(チェロ)に現地でお目にかかり、おふたりから主にオリヴィエ・メシアン『世の終わりのための四重奏曲』について、そしてフランス音楽全般についてお話を伺ってきました。1941年1月15日、ドイツのゲルリッツ収容所で、多くの捕虜を前に初演されたこの作品を、少しでも身近に感じ、多くの方に聴いて頂きたい、というおふたりの情熱を感じていただければ幸いです。

(取材・文：広瀬大介)

----- まずはこの作品、全体を通じて、とにかく複雑で難しそうに聞こえます。リズムについても、いわゆる4拍子とか3拍子とか、従来の拍節の規則に加えて、細かなリズムの規則をメシアン自身が作っていますよね(第5楽章「イエスの永遠性への讃歌」など)。実際、演奏するのは難しいのでしょうか。

ウルリッヒ・ヴィッテラー：これを演奏するときは、その種の規則のことは全然考えないですね。ただスコアをみて、ハーモニーを聴いて…。この楽章はそのゆったりとしたテンポを維持して弾くのが大変です。チェロ・パートは1ページなのに、演奏には10分もかかるんですから(笑)。でも緊張感がありますね。

河村尚子：むしろ、第6楽章「7つのトランペットのための狂乱の踊り」のように、全員で同じ音を演奏するようなユニゾンで、各奏者間で音の抑揚を合わせるのがもっとも難しいのです。

ヴィッテラー： 第 6 楽章ではピアノがその抑揚を教えてくれるのですが、クラリネットとヴァイオリンとチェロとの抑揚があまりに違うので、それを合せるのが本当に大変です。お互いをすごくよく知っている者同士で演奏しても、とにかく難しい。

----- 第 2 楽章「世の終わりを告げる天使のためのヴォカリーズ」も難しそうに感じたのですが。

ヴィッテラー： この曲はそれほどでもないですね。各パートが独立しているので。

河村： ここでは、ある音符、ハーモニー、リズムのパターンを異なる組み合わせで別の箇所でも使う、というメシアンの典型的な作曲法が見られます。実は、同じ音符とハーモニーが異なるリズムの中で使われる同じ手法を、モーツァルトの『ピアノ協奏曲第 25 番』ハ長調にも見つけたのです。この技法は、古典的でもあるけれど、とても斬新でもある。メシアンが用いたのも、きっと同じアイデアだと思うのです。モーツァルトはとてもモダンだったのでしょうか。



森の中で鳥の声を楽譜に書きつけるメシアン

----- 河村さんにとっても新たな挑戦であるメシアンの作品、聴衆のみなさんにはどのような部分を聴いてほしい、とお考えですか。

河村： そう、私もメシアンを演奏するのは初めてです。新しい世界を発見するのは、自分自身にとってもチャレンジです。

ヴィッテラー： メシアンの作品にまったく先入観がない最近の若い学生は、いろいろな作品をぱっと聴いたときに、むしろ古典派の作品などよりもメシアンのほうをカッコイイとおもって受け容れる傾向がありますね。

河村： モーツァルトって言われると、教養がないと弾けない、聴けないっていう逆の先入観が、若い人たちにはあるのかもしれないですね。

----- 今回、メシアン作品では、素晴らしい共演者に恵まれています。

河村： クラリネットのセバスティアン・マンツとは何度も演奏したことがあります。彼は演奏する曲をすべて暗記していますね。まさにこの曲の「プロ」で、ヴァイオリンの佐藤俊介さんと私たちは初心者のようなもの。セバスティアンは、日本ではあまり知られていないかもしれないけれど、素晴らしい演奏家です。

ヴィッテラー：セバスティアンとは、ブラームスとモーツァルトのクラリネット五重奏曲で共演してから、一緒に演奏するようになりました。演奏会ではとても自然な流れを大切にして、それに反応するような音楽を作ります。ほかのクラリネット奏者と比べると、彼は唯一、ひときわすばらしい音色を持っているんです。弦楽器にとって、クラリネットとの共演は、音色の面で合せづらいのです。三度の和音であっても、音程がうまく合わないことが多いけれど、セバスティアンはなんでも完全に合せてくれる。それと、リハーサルでやったことに固執しすぎないで、よく聴いて自由に反応してくれます。



河村：彼は、ザビーネ・マイヤーの数少ない弟子のひとりでもありますね。聴衆・音楽愛好家の人たちだけでなく、プロの演奏家たちも、彼の演奏を聴いてほしいです。オーケストラで演奏する人でも、ソロで演奏する人でも。日本で彼の演奏を聴ける数少ない機会ですから。

----河村さんは、すでに佐藤俊介さんとは何度か共演していますね。

河村：そうですね。最近、彼は演奏スタイルをバロックに変えていることもあり、今回のメシアンは挑戦だと言っていました。チャンスでもあり、楽しみにしています。

ヴィッテラー：室内楽で一番大事なのは、奏者がお互いにいい時間を楽しむということ。そうすれば、うまく響き合うものです。

河村：それに、彼はひとつのやり方にとらわれることがなく、考えていることをなんでも言ってくれる。とても楽しみにしています。



---- 河村さん、そしてドイツ人であるヴィッテラーさんにとって、フランス音楽とはどのようなものですか？

河村：フランス音楽では、すべてがとてもはっきりしていると思います。スラブ音楽やドイツ音楽などとは違って、感情が溢れすぎていない。とても理性的で、コントロールが効いている、というのが私の印象です。フランス人自身もそういうところがありますよね。たとえば、ラヴェルは、自分が作曲しているものの内容をよくわかっている。ブラームスもわかっているのですが、すべてが濃厚ですよね。

ヴィッテラー：フランス人は、ほかの国の作曲家に比べて、書きたいことをそのまま音楽に書いているからかもしれない。どのように演奏される音楽なのかについて楽譜に書かれている情報が、他の国の音楽よりも多い。書いてあるとおりに演奏すれば、ちゃんとそのように聴こえる音楽です。尚子が言う「はっきり」というのは、音楽としてきちんと聴こえるようにするために、いろいろなものを足さなくてもいいということ。ブラームスでは、クララ・シューマンとの関係とか、あれもこれも知っていないといけない。

河村：作曲家がどう演奏してほしいかが、はっきりと書かれていますよね。いわば、モネの絵を見てきれいだなと思うのがドビュッシーだとしたら、その延長でメシアンを聴けばいいということです。すごくわかりやすい。メシアンの音楽を敢えて画家に擬えらしたら、セザンヌかもしれない。セザンヌは印象派からさらに自身の様式を発展させたひとですからね。

---- ありがとうございました。

